

中近世村落における宮座の変質と再編

結衆、長男衆、そして神楽講

菌部寿樹

The Transformation and Reorganization of Miyaza in the Villages of Medieval and Early Modern Japan

はじめに

- ① 服部神樂講の現況と文書の伝来
- ② 宮座の変質—結衆から長男衆へ—
 - (1) 結衆（一四〇—六世紀）
 - (2) 長男衆（一七・一八世紀）
 - (3) 変質の意義

【論文要旨】

本論文は、中世・近世における大和国平群郡服部郷（現奈良県生駒郡斑鳩町大字服部）宮座の変質・再編とその背景について考察したものである。本論文の素材は、服部素戔鳴神社における服部神樂講に伝來した文書二五点である。

服部郷では、一四世紀から新福寺社・牛頭天王社における「結衆」の宮座が史上にみえはじめる。この結衆が一七世紀に長男衆に変わる。結衆の宮座と村方の非宮座成員とが対立し、「アラトウ」という新規宮座加入者や「脇座」の設置など、両者の妥協がはかられた。しかし宮座内差別により、両者の壁は結果的に強化されることとなり、宮座は家を単位とする組織である「長男衆」に変質したのである。このことは、宮座を中心とする家格制が形成したこと意味する。またこれにともない、宮座の村落全体を統括する機能が消滅し、近世宮座の機能は祭礼・法会など宗教的機能と身分規制に限局されていった。

一八世紀後期に長男衆は二六人体制から一二人体制となり、村方との対立が再燃し

- ① 宮座の家格制と家株
- ② 宮座の社会的機能の変質
- ③ 宮座の再編—長男衆から神楽講へ—
 - (1) 長男衆一二人体制（一八世紀後期）
 - (2) 神楽講への転換（一九世紀前期）

おわりに

深刻化する。そして宮出入の結果、氏神修復田支配に村方が介入するようになり、さらには氏神牛頭天王社や新福寺の主導権も村方に奪われてしまう。これと並行して、新福寺長男衆は一八世紀後期に牛頭天王社「宮座」となり、一九世紀前期には「神楽講」へと変わる。この時期、本座である「拾四人組講」に対しても村方の圧力を背景に持つ新座「九人組講」が結成され、宮座が二座体制となつた。この新座に対して本座は、龍田神社（龍田新宮）の三里八講祭祀である「神楽」を強く意識した「神楽講」という名称を採用した。ここには、龍田神社の権威を用いて新座に対する優越性を誇示する狙いがあつたと思われる。一方、新座は村方の圧力を背景として牛頭天王社の後身である素戔鳴神社に密着し、その伝統的な行事である結鎮を強く意識したケイチン講へと発展したと思われる。宮座変質の帰結であるこの再編によって、宮座内差別が強く固定化される一方、宮座行事の主導権が神楽講から村方の力を背景とするケイチン講へと移つていったのである。